

# 五郎沼通信



第17号 平成29年8月発行

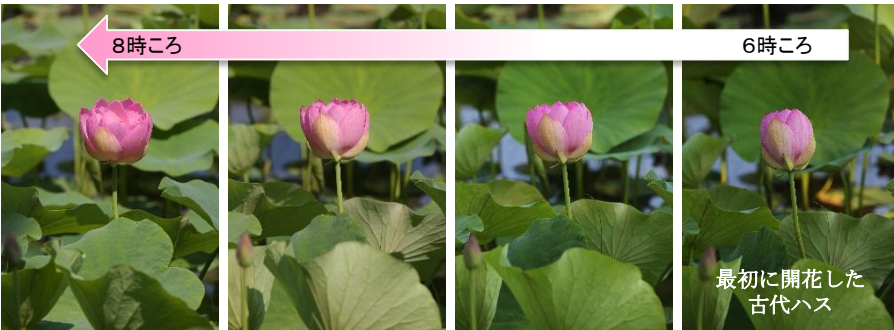
この通信は、五郎沼の桜や周辺環境を守りながら、五郎沼の活用方法や今後のあり方を地域の皆さんと考えるために発行します。  
(発行部数:200部)

発行者：「五郎沼の桜を守る会」  
事務局 瀬川峰雄  
紫波町南日詰字小路口70-1  
電話：019-672-2656 (FAX兼用)  
携帯：090-2270-6771  
m-mail：segawa@mineo.jp  
Pcmail：shiwajokaso@crest.ocn.ne.jp

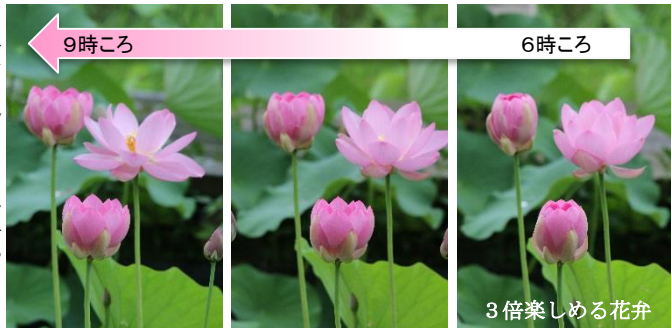
## 五郎沼古代ハス 7月7日に開花!

今年の古代ハス(中尊寺蓮)の開花は昨年より2日遅い7月7日でした。

今回掲載している写真は、ご存知の方もいるとは思いますが、数年前より毎年、高額なカメラを持って来て定点観測をしている、南幅(みなみはば)さんよりデータをいただきました。  
左の画像は、今年最初の



開花されたものです。また、右の画像は別な3つの花弁の開き具合が撮れている古代ハスを、時間ごとに連写したものです。  
南幅さんは古代ハスが咲いている期間ほぼ毎日、早朝から来ていますが、そんな方でも「ポン」の音は聞いてないと言っています。  
その説は、仏教の教えからきているらしいことが分かります。「悟りは急に訪れることもある、というたとえ」とも…。ということは、悟りを開かぬ限りは聞こえない音なのでしょうか…?



## 福島県国見町の中尊寺蓮を鑑賞してきました

五郎沼古代ハスと同じく中尊寺から平成21年4月に株を分けて頂き、地元有志で育てている福島県国見町に訪問してきました。

鎌倉の源頼朝軍と平泉の藤原泰衡軍との最初の戦いの地で、現在は国指定にもなっている「阿津賀志山防塁」の近くに、田んぼ45アールまで広がっていました。今後「予定地・約20アール」も増やして行く計画とのことでした。

五郎沼古代ハス(中尊寺蓮)の見ごろはお盆くらいまでですが、国見町では6月中に咲きだし、9月上旬くらいまでの長期間の鑑賞ができるとのことでした。



左下の写真は、真ん中付近に水面が、池のように見せていて、池中びっしり蓮の葉で覆われているよりは、水面鏡に映る蓮の花も観賞用として、大変すばらしいと思いました。(右下写真が拡大)

国見では、新たな芽を出させるように、有志の方20名くらいで、バックホーで田んぼを掘りおこしていること(蓮レンコンを切り、新芽を出している)が、土も活性されるようです。当然、窒素分は少なめの施肥と、大変苦勞する草取りも毎年行っています。

国見町も国指定「防塁」が観光の要となっているようなので、中尊寺蓮も関連してこの様に力を入れているようです。

さて、「防塁」とは裏面特集の「柵」とは呼び方が違えども、戦いの際に敵を防ぐ要塞施設ですが、今回はたまたま、同じような史跡を特集してみました。



# 大鳥井山柵（横手市）とひづめ

五郎沼通信第15号で紹介させていただいた、横手市の国指定史跡「大鳥井山柵」を尋ねてみました。

大鳥井山柵は平安時代の、清原光頼（みつより）頼遠（よりとう・大鳥山太郎）父子によって築かれたと伝えられます。当時、清原一族は前九年の役（1051～62年）により、奥羽一帯を支配していました。

一族の内紛に端を発した後三年の役（1083～87年）は、横手盆地一帯に戦火がひろがり、この大鳥井柵も横手市の北部にある金沢柵とともに焼失し、源義家と（藤原）清衡の連合軍に敗れた一族は滅亡しました。

## ◎場所

大鳥井山柵跡は、横手市役所本庁舎から北東約2kmの横手市大鳥町にあり、小吉山、大鳥井山、台処館と称される三つの丘陵の上にあります。

## ◎特徴

この遺跡は『陸奥話記』により、清原氏の一族大鳥山太郎頼遠の本拠地と考えられ、安倍氏の鳥海柵とともに確実性が高い城柵のひとつです。

昭和52年から7年にわたる発掘調査

が行われ、小吉山東部（標高約75m）での調査により、土塁・空堀が二重に巡る防御性の極めて高い城柵であることが明らかになっています。土塁・空堀の内側、すなわち居住域の外縁には柵列も作られています。また、柵に沿って物見櫓と考えられる建物も存在し、外側の堀

には土橋が架かる場所もされた内部には掘立柱建物跡や、堅穴検出されました。これらの施設で区画住居跡などが作られており、掘立柱建物跡は、1間×1間または1間×2間と比較的小規模です。堅穴住居跡にはカマドはありませんでした。（横手市HPより）



## 五郎沼が築堤されたところ・比爪藤原氏の時代（5）

「かわらけ」と

平泉3点セット

前回まで、五郎沼周辺から大量の「かわらけ」が出土するお話ししましたが、「かわらけ」とは三省堂大辞林によると「（土器）〔二瓦（かわら）筒（け）の意〕」

- ① 釉（うわぐすり）をかけてない素焼きの陶器。
- ② 素焼きの杯（さかずき）。
- ③ 酒宴。酒盛り。

などの意味があります。これらの「かわらけ」は宴会で使用する、一度使用されると穢（けが）れるので、廃棄排されます。かわらけが大量に出土することは宴会が多く催されていたことを意味します。この時代の宴会はただ酒を飲むのではなく、主従関係の確認や座る位置による序列の確認などの意味がありました。立派な館で、酒宴を催すことにより、樋爪館の当主と周辺の豪族たちとの主従関係が結ばれていました。また、館には、白磁や青磁など輸入陶磁器や常滑や珠洲などの国産陶器の皿、壺、水差しなどが使用されたり、飾られていました。「かわらけ」「輸入陶磁器」「国産陶器」などを平泉町の八重樫忠郎



大銀遺跡から出土した「かわらけ」

五郎沼の堤体の草刈を小路口と箱清水地域のみなさんの協力を得て、今年も5月27日、7月2日行いました。（後一回は8月26日予定です）

左写真は、4号線沿い西側堤体ですが、笹藪がまた多くなっていました。沼の水辺付近までの笹藪を刈る場合は、姿勢を悪くして作業しなければならぬため、まだ笹が多く残っている状態になっています。

元々、根が強い笹だからだと思えますが、堤体半ばまで根が伸びていました。それも、温暖化影響なのでしょう。草刈期間の約一ヶ月間で、このように、1メートルくらい伸びていました。



30年前に草刈りを始めたころは、この笹藪がびっしりありました

編集後記